

令和3年度LCセミナー:言語文化学への招待

平成14年度発足の「教員のための英語リフレッシュ講座」を発展的に解消し、2022年4月開設予定の大学院人文学研究科・言語文化学専攻に所属予定の教員による「言語文化学」公開講座として、新たに「LCセミナー:言語文化学への招待」をスタートさせます。これからのグローバル化社会の発展に必須である、最新の言語文化学の知見に触れる場を提供します。講師は文化学、教育学、コミュニケーション論、言語学、デジタルヒューマニティーズと幅広い分野の第一線で活躍中の本専攻の教員です。言語文化学の異なる分野の講演から、コロナ禍、広く「言語」についてもう1度考えてみませんか。本講座を通して、参加者の皆さまが言語文化学に興味を抱き、言語文化学専攻において研究をしてみたいと思っただけの事を願っています。

- 日 程 令和3年9月11日(土)13時~16時15分(予定)
 - 会 場 オンライン(Zoom)にて開催
 - 受 講 料 無料
 - 定 員 300名(先着順、定員に達した時点で大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻HPに掲示します)
 - 受 付 期 間 8月9日(月)~9月9日(木)
 - 申 し 込 み 次のリンク先のフォームからお申し込みください。引き続き行われる入試説明会にも同じフォームからお申し込みいただけます。
<https://forms.gle/49ecB7P44v2qvttc7>
 - 問 い 合 わ せ 大阪大学大学院言語文化研究科・外国語学部豊中事務室総務係
(E-mail: genbun-soumu@office.osaka-u.ac.jp TEL: 06-6850-5855)
 - プログラム
- | | | | |
|-------------|-------|--|---------|
| 13:00~13:10 | 開会の挨拶 | 言語文化研究科筆頭副研究科長・言語文化専攻長 | 宮本陽一教授 |
| 13:10~14:05 | 講義1: | ロシア革命とセクシュアリティ | 北井聡子講師 |
| 14:10~15:05 | 講義2: | 「共通語としての英語」での対人関係構築:
会話分析による第二言語語用論入門 | 岡田悠佑准教授 |
| 15:10~16:05 | 講義3: | “Zooming in and zooming out”
ーデジタルヒューマニティーズがかなえるミクロとマクロの読みー | 田畑智司教授 |
| 16:05~16:15 | 閉会の挨拶 | 言語文化研究科副研究科長 | 由本陽子教授 |

*公開講座終了後、16時20分より令和4年度大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻入学試験説明会を開催します。

*大学院人文学研究科ならびに言語文化学専攻の情報は以下のサイトでもご覧いただけます。

人文学研究科 HP <https://www.hmt.osaka-u.ac.jp/>

人文学研究科 Facebook <https://www.facebook.com/HmtOsakaUniversity/>

人文学研究科 Twitter https://twitter.com/ou_hmt_info

講師プロフィール & 講義内容

ロシア革命とセクシュアリティ 北井聡子 超領域文化論講座 講師

■プロフィール：博士（学術）。専門は、ロシア文化・思想、ジェンダー、セクシュアリティ。2019年ロシア文学学会賞受賞。著書に『ロシア文化55のキーワード』（分担執筆：ミネルヴァ書房）、『ロシアを知る事典』（分担執筆：丸善出版）

■講義内容：1917年のロシア十月革命は、社会・経済制度だけではなく、「生＝人間そのもの」の変革も射程に入れたものでした。その壮大なプランの中において、重要な課題の一つとして議論されたのが、男女平等や恋愛/性の問題です。本講義では、歴史上、ユートピア/アンチユートピア文学・思想において性の問題がどのように扱われてきたかを概観した上で、ロシア革命期のセクシュアリティの議論の諸相を考察したいと思います。革命が夢見た来たるべき理想の共産主義世界—それは公/私の領域の消滅した一元的な「公的世界」であり、ここで性愛や恋愛も、すべて「公的」な観点から議論されることとなります。セクシュアリティというプライベートな問題がパブリックな社会全体とどのようにつながるのか、という議論は、現代の私たちの社会にも示唆を与えるものでしょう。

「共通語としての英語」での対人関係構築： 会話分析による第二言語語用論入門 岡田悠佑 第二言語教育学講座 准教授

■プロフィール：博士（学術）。会話分析を用いた第二言語語用論研究が専門。著書に *Assessing second language pragmatics* (Palgrave Macmillan) (分担執筆) など。 *Journal of Pragmatics* (Elsevier) や *Pragmatics & Society* (Blackwell), *Classroom Discourse* (Taylor & Francis) など国際誌に論文掲載多数。

■講義内容：母語以外の言語（＝第二言語）を学ぶ理由の1つに、その言語を使う人と親しくなりたい、友だちになりたいという動機づけがあります。しかし、具体的にどうやってその言語を使う人と親しくなることができるのでしょうか。第二言語での対人関係の築き方は、これまでの研究が十分に解明できていないトピックの1つです。人は初めて会った時の印象が重要だとも言われますが、それは本当なのでしょうか。第二言語で初対面の人と接する場合も同じことが言えるのでしょうか。本講演ではこうした疑問を出発点に、第二言語を用いて良い対人関係を築くための具体的方法を検討します。そのために、共通語として英語を話す人同士の初対面会話を研究資料とし、会話分析 (Conversation Analysis) という研究手法で詳細に分析します。これまでの対人関係研究で示唆されている親しい関係を築く要件の1つ、「共感の構築」を手がかりに、共感と自己像の(再)提示が対人関係の構築をどのように左右するのかを紐解いていきます。最後に、第二言語を用いて行為を達成する能力を研究する第二言語語用論として、対人関係構築に影響する第二言語の使用をどのように教育・評価すればよいのかを議論します。

“Zooming in and zooming out” —デジタルヒューマニティーズがかなえるミクロとマクロの読み— 田畑智司 理論言語学・デジタルヒューマニティーズ講座 教授

■プロフィール：データサイエンスと言語文化学を融合させたアプローチにより英語の「スタイル」を研究。Digital Humanities Day (British Library, 2019年), Korea-Japan Collaborative Symposium on Digital Humanities (韓国東国大学, 2020年), Poetics and Linguistics Association 2021 (国際文体論学会, 英国 Nottingham, 2021年) などデジタルヒューマニティーズに関する招待講演実施。

■講義内容：iPhone/iPad, Kindle 等に代表されるモバイル・デバイスの爆発的な普及により、文書・資料の電子化が急速に進み、ポーンデジタルのテキストデータは増加の一途を辿っています。データ量を示す単位はバイトから、キロバイト、メガ (バイト), ギガ, テラ, ペタ ... とこの30年ほどで 10^{15} 倍に、すなわち、15桁大きな単位が使われるレベルまで拡大し続けていますし、次の単位 (10^{18} , さて何と呼ぶでしょうか?) が使われ始めるのもごく近い将来のことになるでしょう。これにともない、膨大な文書データの中から有益な情報を効率的に探し当てる技術の開発が学界のみならず産業界においても求められています。

大量のデジタルテキストの遍在は、従来の人文学の理論・方法論や枠組みの再編を余儀なくしただけでなく、情報工学、統計数学、機械学習など、かつては人文学とは無縁と思われていた領域の知見を統合した新しい人文学「デジタルヒューマニティーズ (DH)」を生み出しました。この講義では、DHがかなえる新たな「テキストの読み」について、特に、ミクロとマクロの両面にわたって紹介したいと思います。